キタを愛する人たちのための、キタを再発見するマガジン。ネットに載らない情報テンコ盛り。

つひまぶ 沖縄号

つながるひとまちぶんか

2017 3月号

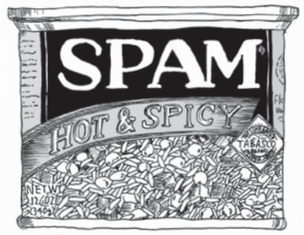
北区魅力発信フリーペーパー「つひまぶ」vol.10　2017年3月31日発行（毎年3･7･11月発行予定）　**編集・発行:**つひまぶ実行委員会／大阪市北区役所＋北区のおもろ通信団（浅香保ルイス龍太・棚橋真理・平井裕三・松岡慧祐・山田寿也・依藤智子）＋大阪市職員ボランティア＋協力：奈良県立大学地域創造学部　**連絡先:**大阪市北区役所（大阪市北区扇町2-1-27）【tel】06-6313-9743　【fax】06-6362-3821　【mail】tsuhimabu@gmail.com　【blog】http://tsuhimabu.blogspot.jp（誌面に載せきれない情報はブログでね♥）　**定価:**0円　**主な配布場所:**大阪市北区役所･北区民センター･大淀コミュニティセンターほか多数（配布場所はブログにて随時お知らせします）
※当雑誌の内容、テキスト、画像、イラスト等の無断転載・無断使用を禁止します。

北区のウチナンチュー

大正だけじゃない！北区にもあるウチナンチューの歴史と文化と生活

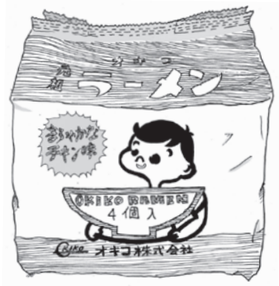
北区で手に入るオキナワ印

イラスト：むしまつ



「SPAM HOT & SPICY」
SPAM は、米国ホーメル社が1937年（昭和12年）、世界に先駆けて開発したポークランチョンミートの元祖ですな。戦後、アメリカの統制下だった沖縄で爆発的にひろがっとります。その SPAM にタバスコが入ってスパイシーに仕上がったのが、このホット＆スパイシースパム。ピリ辛、ビールに最適☆（ルイス）

「島ぞうり」
ビーチサンダルならぬ「島ぞうり」。ごくごく標準的で安価なビーサンとなんら変わらないけれど、やっぱ、「島ぞうり」と呼ぶと、気分は一気に南国☆赤、黄、緑、青、黒、白、ピンク…、いろんな色があります。（ルイス）



「オキコラーメン」
かわいいパッケージと「まろやかチキン味」の文字がレトロ感満載の「オキコラーメン」。じつに半世紀にわたってウチナンチューに愛され続けているソウルフードは、食べかたいろいろ。そのままスナックとして食べてもいいし、熱湯かけてラーメンとして食べるもよし。（ルイス）

「パイナップルアメ」
おなじみ、セイカ食品の「ボンタンアメ」か？と思いきや、沖縄では「パイナップルアメ」。懐かしのオブラートは、パイナップルアメにもしっかりと使用されています～。（ルイス）

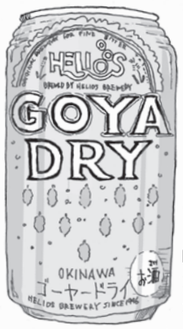
「ぷっちょ シークァーサー味」
独特のプチプチ感がクセになる、おなじみぷっちょの沖縄限定シークァーサー味。シークァーサーの果汁には血圧や血糖値を抑える効果があると言われているけれども、ぷっちょにそれを求めてはいけません。（ルイス）

「ぜんざい」
沖縄で定食を食べると、十中八九、ぜんざいがついてきます。不思議ですが、定番なのです。ちなみに、冷やして食べます。かき氷に乗せることもあります。ところで、私たちが一般的に食べるあったかいぜんざいは、沖縄では「ホットぜんざい」と呼びます…。（ルイス）

「オリオンビールのマスキングテープ」
オリオンビール公認。缶がプリントされた黄色と水色のマステのセット。黄色は大小のオリオンビール缶、水色はきれいに並んだオリオンビール缶。見つけたときのテンションの上がり具合が異常だった☆（むしまつ）

「こーれーぐーす」
沖縄そば店にほぼ100％の確率で常備されている、泡盛に島唐辛子を漬け込んだ辛味調味料。そばにかけても酔っ払ったりはしないけど、かけすぎると、あまりの辛さに死にそうになります。くれぐれもかけすぎ注意。（ルイス）

「オリオンビール」
お酒を飲む人なら、沖縄といえばコレ！爽やかな香りとさらっとした喉ごしで、もうひとくち！もうひとくち！と飲みたくなる。沖縄県内でのビールシェアは、もちろん最大。（むしまつ）



「ミキ」
缶に、飲む極上ライスとプリントされてます。謎すぎです！これ、白米をベースにした甘いドリンクで、宮古島では古くからポピュラーなドリンクなのですが、いやー、県外ではまったくの無名ですね。よく振ってから中身をコップに注ぐと、とろみのあるベージュ色…。口に含むと、まさに炊飯器を開けた瞬間のような、炊きたてごはんの香りがふわり！まろやかで濃厚な口あたりは、お粥や甘酒にも似ています。が、お米のつぶつぶはないので、喉ごしなめらか。ちなみに、泡盛で割ると、たまげるほどの超絶ライスミルク割りになります！（ルイス）

「ゴーヤドライ」
ゴーヤ果汁入り。緑色をしているわけではない。口のなかに入れたとき、鼻に爽やかさが抜ける。後でほのかにゴーヤの苦みが。いやな苦みではない。肉や油の多い料理に合いそう。（むしまつ）

「わした 大阪天神橋筋店」（天神橋4-7-25）・「沖縄奄美ちゃんぷる物産」（天神橋2-3-28）などで、手に入ります。

編集後記

沖縄料理を食べながら、お店の人や沖縄出身の人に、沖縄の話や大阪に来てからの話をうかがいました。お店の人と話しているのに、いつの間にか隣り合わせた他のお客さんとも仲良くなって話している不思議。また、沖縄料理店でおこなわれるライブとカチャーシー。カチャーシーではお店にいる人みんなで輪になって踊ります。終わる頃には踊り歩いている前後の人と仲良くなって、ハイタッチしている不思議。話していても、歌って踊っていても、その場にいる人みんなが仲良くなってしまう不思議。いつの間にか、その場にいる人とひとつの輪になっている。今回、取材中に一番強く感じたのは、沖縄の人の輪をつくる力でした。そして熱気。気持ちが晴れやかで清々しくって、熱い。そしてそれを楽しみに集まる人々。沖縄はキタでしっかりと根付いていました。そして、これからさらにキタの沖縄として進化していくのだろう、という予感。やっぱりキタっておもしろいです。（棚橋真理）

「つひまぶ」ブログ
毎週月曜更新
http://tsuhimabu.blogspot.jp

「つひまぶ」では、編集メンバーを随時募集しています。興味がある方は、Facebook にてご連絡いただくか、大阪市北区役所地域課区民協働担当（tel. 06-6313-9743）までご連絡ください。

オジィ、オバァ、あなたはなぜ沖縄からやって来たのですか？

かつて、那覇と大阪を定期航路が結び、多くのウチナンチューが大阪にやって来ました。彼らはやがて、大阪にウチナンチューの文化をもたらし、今では大阪の大きな魅力のひとつになっています。その流れは北区にも届き、しっかりと根付いています。

企画・構成・文／浅香保ルイス龍太

ときは大正年間。天六交差点の北西に、染物の工場がありました。

たまたまだったのか、なにかのツテがあったのかは定かではありません。島出身の青年がひとり、その工場で働きはじめるのです。彼の働きぶりはすこぶる優れ、島の知り合いや友だちを呼んできてほしい、と工場から頼まれます。

それがすべてのはじまりでした。以降、今に至るまで、島からは、親類を頼り、友人を頼り、多くの人がこの地にやって来ました。染物の工場だけでなく、働く場所はひろがり、独立して事業を起こす人、店を開く人…、夢を現実のものとするため、額に汗し、島の人たちは、懸命に働いたのでした。

「島から出てきた以上は、島に恥ずかしくないよう、がんばる。それに、広い世界の大阪がよかった」。

半世紀前に島から移住して来られた大阪北区沖縄県人会の伊佐善幸副会長は、そのように語ります。

那覇から北西約60キロメートル。フェリーで約2時間半。東部にはリーフに囲まれた美しい砂浜がひろがる周囲12キロメートルのその小さな島は、沖縄民謡の大御所・登川誠仁を起用して人気を博したミュージカル的映画『ナビィの恋』（1999年公開）の舞台として、知る人ぞ知る島でもあります。

その島、「粟国島」の現在の人口は約900人。一方で、北区の本庄界隈では、粟国島にルーツを持つ人々が約300世帯も暮らしていて、もはや故郷の島と肩を並べるほどの一大コロニーを形成し、島と濃密なつながりを持っています。

「隣のブロックで葬式があったとき、どうかすると、この地域の連絡網よりも島からのほうが早く連絡が来るときがある」と語るのは、本庄地域の連合町会長と粟国村村人会会長を務める宮里展弘さん。

こうなると、もはやこの界隈は粟国島の方々は地域の商業や文化の発展のための重要な一翼を担っているのです。

まずこの事実を知るところからはじめよう。そんなところから、北区の地域情報誌つひまぶでは、「沖縄」を特集することにしたのでした。

行政が、移住者や移民の実態を把握しているわけではありません。古来より日本の「正史」は、そこに定住する人たちの歴史でした。しかし、そうではない、定住せずに移動を重ねてきた人々の歴史だって、厳然とあるはずです。そうした日本の正史にはなかなか描かれることのない歴史のミッシングリングを追いかけて、つひまぶ編集部は奔走しました。

沖縄県人の移住が本格化したのは、第1次世界大戦後。沖縄では、深刻な不況下で食料に事欠き、そのまま食べれば死に至るほどの毒を持つソテツの実や幹を口にして糊口をしのいだ、「ソテツ地獄」と呼ばれる苦しい時期がありました。

「ソテツは毒があるので、徹底してアク抜きをしなければなりません。葉を切り、皮をむいて、洞穴に持っていき、ワラを敷いた上に置いて、何度も何度も流水にさらして、アクを抜いて食べます」。昔を懐かしんで、そのように語る人はたくさんいます。

「粟国島は産業がない島。海が少し荒れると、畑に海水が降り注ぎ、作物は塩害でダメになります。もちろん、海が荒れると船も入ってきません。そうなると、すぐに食料が底をつく。そこで、海水に強い植物のソテツを食べることになります」。

粟国島出身の人はそう言います。

そのような逼迫した事情から抜け出したい一心で、人々は大阪を目指したと言います。その頃、大阪では、綿紡績や鉄道などを中心に、それを支える商社や銀行などの活動が一体となって日本の工業化の先頭に立つ、「東洋のマンチェスター」と呼ばれる時代を迎えていました。

その後、第2次世界大戦後まもなくの1951年（昭和26年）、関西汽船の「新興丸」を筆頭に「くろしお丸」「浮島丸」「那智丸」「沖ノ島丸」「若潮丸」などが就航し、那覇と大阪・神戸に、人々の夢を乗せた定期航路が誕生します。

深刻な不況が続いたこと、戦争の爪痕が深く復興が遅れたこと、産業が少なかったことなどから、沖縄から多くの人々が大阪を目指しました。また、狭い島世界から、水平線の向こうの大きな世界を夢見て雄飛した人も多かったようです。

飛び地なのでは?と思えてきます。

粟国島だけではありません。沖縄本島、宮古、石垣…、正確な数字はわからないけれども、北区には、じつに多くの沖縄出身の方々がいます。リトル沖縄と呼ばれる大正区のように沖縄料理店が軒を連ねているわけではないので、表立って知られているわけではありません。しかし、目を凝らし耳を澄ませば、琉球舞踊教室があり、三線の音が聞こえ、サーターアンダギーや沖縄そばが売られており、そこかしこで沖縄の気配に触れることができます。

そう、ここ北区においても、沖縄出身のいだでも、この制度はしばしば活用されてきました。その背景にあるのは、「結い（ゆい）」の精神です。互いに助け合い、人々を結びつける沖縄の精神は、大阪に移住してきた沖縄の人々を結びつけるだけでなく、大阪と沖縄をも結びつけています。

さまざまな歴史的な背景から、沖縄の人々が、本土へ、大阪へ移住してきました。そこには、簡単な言葉では言い尽くせない想いがあったことは、想像に難くありません。そんななかで、数々の事業を展開し、地域の発展に寄与されてきたことは、もっと知られてもいいのではないでしょうか。

また、この地で継承されてきた沖縄文化は、時代の流れとも相まって、大阪の人々を魅了し続けています。最先端の情報発信拠点としてのキタ、連綿と受け継がれる天神祭、水の都・大阪…、北区の魅力は数多くありますが、それらに奥行きを与えているもうひとつの魅力が、ここにはあります。

豊崎本庄小学校では、最盛期の頃には、全校生徒のうちの約15%が粟国島にルーツを持つ生徒だったそうです。1975年（昭和50年）には、学校創立100周年を記念して、粟国小学校と姉妹校提携を結んでいます。同時に、粟国島を象徴するソテツとサンゴ、桜の植樹がおこなわれました。今でも、校舎に面した場所に、校庭で遊ぶ生徒を見守るようにして、それらのモニュメントは佇んでいます。

沖縄と大阪とのあいだで築かれた「結い」のかたちが、ここにあります。（終）

しかし、移住後の生活では、本土との文化や風習の違いに悩む人も少なくありませんでした。言葉の問題や生活習慣の違いだけでなく、就職では不当と思われる差別があり、賃貸住宅には「琉球人おことわり」の貼り紙、銀行は融資をしてくれない…、さまざまなことがあったようです。沖縄から移住してきた人たちの体験などの生の声をオーラルヒストリーとしてまとめた『大正区の歴史を語る2』（大正区役所発行）には、当時のそんな様子が克明に記されています。

そんななかでも、沖縄から移住してきた人たちは、大阪の産業の発展に大きく寄与していきます。

たとえば、映画興行界。日本映画界の黄金時代と呼ばれる1962年（昭和37年）の『映画便覧』（時事通信社発行）にある名簿を見ると、沖縄出身の人々の名前が次々に出てきます。この年、大阪市内の映画館数は280館。うち、30館、つまり約1割を沖縄出身の人々が経営しています。娯楽の少なかった時代に、元来、芸能に長けた沖縄の人々がはじめた芝居興行がやがて映画興行へと発展し、大阪の芸術と娯楽を裏側から支えていたのでした。沖縄戦で看護師として前線に立ったひめゆり学徒隊の悲劇を描いた戦争映画『ひめゆりの塔』が大ヒットしたのは、1953年（昭和28年）のことです。

また、1927年（昭和2年）に普久原朝喜が大阪で起こした沖縄民謡専門のレコード会社『マルフクレコード』は、創立当初から新作を手がけ、大阪の地から沖縄音楽の発展に大きく寄与していきます。

ほか、港湾の仕事や建設、土木、運送業、飲食業など、さまざまな分野で、沖縄の人々が大阪の発展を支えてきました。

そうした時代を経て、現在、大阪で暮らす沖縄からの移住1世の人々は、その多くが、アメリカ世（アメリカゆ／アメリカ統治時代）のときに、大阪にやって来た人々です。琉球政府が発行するパスポートを携えての渡航でした。

沖縄が本土復帰を果たした1972年（昭和47年）には大阪沖縄協会が設立され、それから4年後の1976年（昭和51年）には、大阪 北区沖縄県人会も結成されました。本土復帰を記念して、地域の盆踊りで沖縄民謡を踊ったこともありました。

本庄会館では舞踊大会もおこなわれています。2世3世と代を重ねるなかで、この大阪の地で沖縄文化を残し、発信していこうとする盛り上がりを背景に、組織化の動きが起こりました。

こうして、この大阪で沖縄文化を絶やすまいとしてきた先人たちの努力は、意外なかたちで実を結びます。

2000年（平成12年）に開催された沖縄サミットを契機とし、2001年（平成13年）にNHKで放送された連続テレビ小説『ちゅらさん』は再々放送、さらには続編がつくられるほどの人気を博し、沖縄は一大ブームを巻き起こします。今では、沖縄出身の芸能人をテレビで見ない日はありません。昨年は、『海の声』で大ヒットを飛ばした桐谷健太さんが紅白歌合戦に出場を果たしました。彼は北区で三線を学んだひとりです。また、ゴーヤチャンプルーや泡盛といった沖縄の食文化は、今やすっかり全国に定着しています。

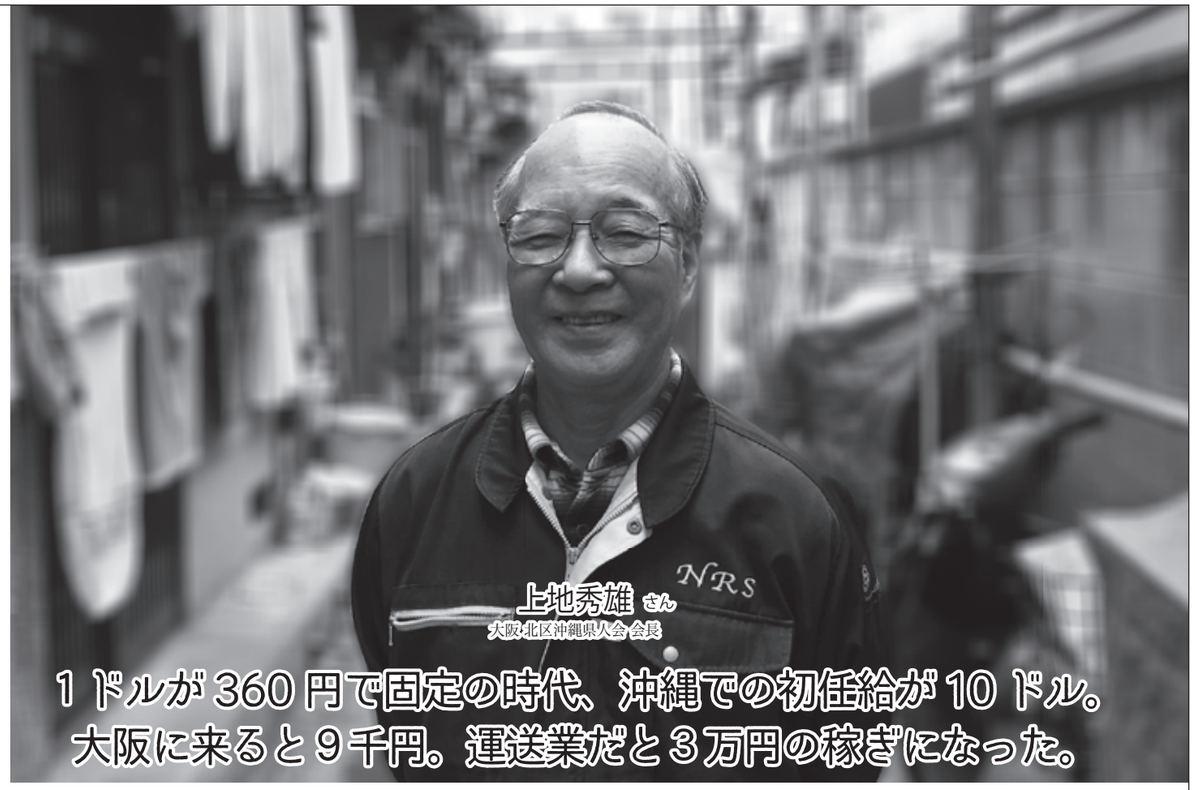
この流れは、これまでとは逆の、大阪から沖縄へと人を向かわせる動きにつながっていきます。沖縄県が発行している『平成26年度沖縄県入域観光客統計概況』によると、1972年（昭和47年）に沖縄を訪れた観光客数が55万9千人だったのに対し、2014年（平成26年）には、約13倍の717万人に増加しています。うち、関西から訪れる人は約2割を占めています。沖縄は日本の主要な観光立国となり、状況は一変しました。今では、大阪から沖縄に移住する人もたくさんいます。

沖縄を訪れ、沖縄に魅せられた大阪人が、沖縄の魅力を大阪に持ち帰るケースも増えました。現在、北区には30軒以上の沖縄料理店があるといわれていますが、そのなかには、沖縄にルーツを持たない人が経営している店も少なからずあります。阪急東通商店街の沖縄居酒屋『轟屋』で定期的にライブをおこなっている『ざ☆ちょんだらーず』は、沖縄民謡に魅了された人たちとウチナンチューが集まったバンドですが、沖縄民謡を出発点としながらも、さまざまなジャンルの音楽を横断し、ハイブリッドな音楽を生み出しています。さらには沖縄に遠征してのライブもおこなっていて、沖縄と大阪が呼応し合っています。

今や、大阪と沖縄のあいだでは有機的な結びつきや混じり合いがそこかしこで起こっていて、その例は枚挙にいとまがありません。

沖縄には、親睦と資金調達を目的とする「模合（もあい）」と呼ばれる、頼母子講に相当する相互扶助の金融制度の文化があります。大阪に移住してきた人々のあ

背景の写真／豊崎本庄小学校創立100周年を記念して植樹されたソテツとサンゴ



上地秀雄 さん
大阪・北区沖縄県人会 会長

1ドルが360円で固定の時代、沖縄での初任給が10ドル。大阪に来ると9千円。運送業だと3万円の稼ぎになった。

大阪で沖縄の香りを感じられる場所といえば、大正。そう思っているそこのあなた、じつは北区にも沖縄出身の方は、たくさんいらっしゃるのです。

北区の本庄界隈には、那覇から北西約60キロメートルの海に浮かぶ、リーフに囲まれた美しい砂浜を持つ島、粟国島の出身の人々が、たくさん暮らしています。

現在、大阪 北区沖縄県人会の会長を務める上地秀雄さんも、そのひとり。粟国島出身の1世です。

上地さんは、中学卒業と同時に那覇へ。夜間高校に通いながら琉球政府の職員となりました。島には中学校までしかないのです。1961年（昭和36年）のこと。当時、沖縄はまだアメリカ統治時代でした。その後、1966年（昭和41年）に大阪へ。

「仕事で取得した大型免許もあるし、大阪に行ったらカネになるよ！親戚連中にそそのかされてね。退職金を前借りして行きましたよ」。

「那覇と神戸のあいだを『くろしお丸』が航行していて、それに乗って、今の神戸タワーがあるあたりに着きましたね」。

最初に働きはじめたところではいろいろと話が違うことも多く、それならと、親戚を頼って北区に来られたそうです。すでに本庄界隈には、たくさんの親戚や同郷の人たちが暮らしていました。

「大阪は人が多くてね。特に、ウメ地下にはびっくりしたのを覚えています」。

北区に来られてからは、建築現場でコンクリートの「削り」の仕事をし、その後、運送会社に就職され、65歳まで勤め上げます。

現在、71歳の好々爺。

「1ドルが360円で固定の時代、沖縄での初任給が10ドルだったのが、大阪に来ると9千円。運送業だと3万円の稼ぎになったんですよ」。

沖縄では海外移住される方も多いし、経済的な事情や歴史的な背景もあるのだろうけれども、どうも、水平線を眺めながら、狭い島世界から遥々とした世界へ飛び出したい欲求を抱えている人が多いような気がします。

「そりゃあね、島の生活は、朝5時に起きて、ヤギや牛の世話をして、草刈りでしょ。それから学校に行って、帰ってきたら井戸で水汲み。島では水が貴重だからね。そのあとはまた草刈り、芋掘り。遊びに行くところもないから、退屈ですよ」。

そんなふうにおっしゃる上地さんですが、それでも、ここ大阪の地で島の文化を残し、発信するために奔走されてきたのでした。

「本土復帰のときには、記念に、地域の盆踊りで踊らせてもらいました。それから4年後の1976年（昭和51年）には、北区県人会を結成しました。毎年11月の第1日曜日には、オール沖縄の体育祭を大正でやるんですよ。それ以外にも、本庄会館で琉舞大会をやったり、教室をやったり。子どもや孫の代になると、だんだんと島の文化から離れていくから、なんとか継承してもらいたいと思ってね」。

また、2003年（平成15年）までは敬老会主催のエイサーや琉球舞踊などのイベントも開催していたのだとか。

取材後、上地さんは、粟国島の地図をひろげ、昔はここに植えたソテツを食べて飢えをしのいでね、東は砂浜がきれいだよ、西は断崖絶壁、こっちの沖は今では有名なダイビングスポットになっているんだよ、鍾乳洞もあるね、と、自慢げに島を紹介してくれるのです。また、その際には、奥さんの手づくりのサーターアンダギーを振る舞っていただきました。今まで僕が食べてきたものはなんだったんだ？と思いたくなるほどに、揚げたてのサーターアンダギーはとても美味しいのです。こんな文化は、粟国島出身の人々のためだけでなく、ぜひ、大阪のためにも残してほしいものです。

そしていつか、粟国島に行ってみたいなあと思ったのでした。そのときは、上地さんに案内していただいて。（ルイス）

沖縄パーティーバンド ざ☆ちょんだらーず
■https://www.facebook.com/chondarars/

4月2日 初ワンマン！

南の島からやって来たハイビスカスの妖精たちは、今宵も大阪と沖縄をひとっ飛び！

梅田の沖縄居酒屋・轟屋。そのステージに、ピエロのような白塗りメイクを施した奇妙な音楽集団が立っています。その名も〝ざ☆ちょんだらーず〟。この日の編成は、三線、島太鼓、ギター、キーボード&ピアニカ、そしてダンサー。一体どんな音楽を奏でるのかと身構えていると、「みんなで楽しい空間を！」と高らかに宣言し、いきなり王道の沖縄民謡「安里屋ユンタ」で敷居を下げてきます。その直後、沖縄流に「かり～！」と乾杯の音頭をとって、たちまち宴会ムードに（笑）少し肩透かしを食らうも、たしかにここは沖縄居酒屋。ウチナーの宴会に巻き込まれたような気がして、自然に酒が進みます。

そう、ざ☆ちょんだらーずは、沖縄の伝統舞踊であるエイサーを盛り上げる道化役〝ちょんだらー〟が由来の沖縄パーティーバンド。沖縄民謡に加え、「島人ぬ宝」（BEGIN）のように耳なじみのいいオキナワン・ポップスもためらいなくカバーし、ライブを、いや、パーティーを盛り上げていきます。しかし、ここまでだと、ただのコピーバンド？そう思いきや、オリジナル曲として披露されたのは、ラブ&ピースなダンスホール・レゲエチューン。沖縄経由ジャマイカ行きの本格的なビートに、思わず腰が動きます。かと思えば、新曲「真夏の楽園カーニバル」は、もはやレゲエというより売れ線のJ-POPナンバー。どこへ連れて行くねん！と再び肩透かしを食らうも、湘南乃風を意識してかノリノリでタオルを振りまわす阿呆っぷりに「踊らにゃ損々」という気分になり、フロアも一体となっておしぼりやハンカチを振りまわします。すると、冬にもかかわらず熱気で汗だくに。あっつ～！でも楽しい！そんなお祭り騒ぎのなか、続いて演奏されたのは、哀愁漂う「お化けのタンゴ」。今度はタンゴ!?しかも、「タンゴタンゴタンゴと見せかけてマンボ！ウッ！フラメンコ！オレッ！」と、もうやりたい放題（笑）いやいや、どこへ連れて行くねん！でも、この振り幅の大きさが飽きさせず、いつの間にかクセになってきます。もうどこへでも連れて行って！

ざ☆ちょんだらーずを率いるのは、島太鼓担当の松本英二郎さん。ソロ活動では、アコーディオンやトイピアノなどで、さまざまなワールドミュージックをユニークに奏でる鬼才です。沖縄民謡も愛する松本さんは轟屋のスタッフとしても働いており、そこで出会った仲間たちと2年前に那覇のライブハウスで即席の民謡バンドを結成。その日かぎりで解散するつもりが、なぜか今日まで続いているのが、ざ☆ちょんだらーずなのです。徳島出身の松本さんをはじめ、メンバーは沖縄出身者ばかりではありません。バンドの編成も流動的で、白塗りのちょんだらーメイクをして踊るだけで、誰でもメンバーになれるのだとか。こうした自由なスタイルこそが、ざ☆ちょんだらーずの真骨頂です。「民謡には細かい型がありますが、そんな民謡のしがらみを取っ払って、みんな自由に楽しんでもらえたら」と松本さん。そのために、ざ☆ちょんだらーずでは、誰が聴いても楽しい音楽を追求しているのです。「自分のやりたいことや世界観にこだわりすぎると、お客さんが置いてきぼりになる。それでは意味がない」と、どこまでも優しくこちら側に降りてきてくれます。それでもただ媚びるのではなく、エッジの効いた表現も小出しにして楽しませてくれるのが心憎いところ。

ライブの終盤、客も総立ちで輪になり、両手を挙げてカチャーシーを踊りながら、フロアをぐるぐるまわって大団円を迎えます。演者も客も、老いも若きも、男も女も関係なく、ただただ「みんなで楽しい空間」がそこにはあります。そのためになら、ピエロになって笑われてやる。ちょんだらーメイクは、そんな彼らの意志を表しているかのようです。（松岡慧祐）

ルーツは沖縄です

ウチナンチューな人々 in 北区

ハイサイ！ハイタイ！ 沖縄といえば、忘れてはならないのが指笛。口のなかで舌を巻き、その上に指を乗せます。口をすぼめて吹きます。このときの指の形には、OK型、V字型、コ字型などがあります。簡単そうでなかなか難しいです。くれぐれも、練習場所と時間帯にはご注意を！

沖縄からパスポートを携えて日本入国！

國吉〝テッド〟哲久さん

北区浮田1-1-15 http://MyDream.jp

沖縄から中崎町、そして米国へ 培った経験と人脈を生かし、人との縁をつなげていきたい

中崎町から世界への窓を開きたい！そんな思いを胸に抱き、「マイドリームジャパン」を立ち上げた國吉哲久さん。みんな、親しみを込めて、テッドさんと呼びます。テッドさんは、中崎町ホールを拠点に、ワクワクしながら世界を知るイベントの企画や世界で活躍する人の支援をおこなっています。

テッドさんは4歳の頃、那覇から来阪します。当時の沖縄は米国に統治されていたため、パスポートを持っての「入国」でした。主に中崎町界隈で育ち、学校卒業後は何社か渡り歩いた末に画像編集サービスの会社へ。ところが、その会社は株式上場を目指すベンチャー企業。入社1年そこそこで米国ロサンゼルスに派遣され、その後、現地で独立することに。ビザの有効期間が切れるタイミングで帰国し、今日に至ります。ジェットコースターのような展開です。

帰国後も事業は継続。電話やインターネットを使って、日本にいながら現地スタッフをコントロールしているそうです。

経歴だけを見ると、テッドさんはバリバリのビジネスマンです。でも、お話をしていると、そんなふうにはまったく見えないのです。なぜですか？

テッドさんは、中学校に上がるとき、学生服が買えなかったのだそうです。お母さんが病気で入院しており、友だちのお母さんが立て替えてくれたおかげで、学生服を買うことができました。米国に派遣された頃は、沖縄県人会の人がパーティーに誘ってくれたおかげで、いろいろな人と知り合うことができました。わずか4年しか過ごしていないのに、沖縄出身というだけで親身になってくれる。そんなことを、忘れずにずっと、胸に刻んでいる人なのです。ビジネスを通じて、あらためて人との縁の大切さを実感するとともに、「世の中には声をかけたら救われる人が他にもいるのではないか」と思うようになったのだそうです。

こうした思いが、「マイドリームジャパン」設立につながっていきます。

まず、仕事のスタイルを売上高重視から収益率重視に転換させ、ロサンゼルスとの時差を利用して、仕事を午前中で終わらせるようにしました。短時間で高収益を上げられるよう、タイム・マネジメントを徹底させます。

そうやって確保した時間を「マイドリームジャパン」の活動に充て、培ったビジネスのノウハウや人脈を生かし、テッドさんは人と人との縁をつなげていこうとしています。無理せず、ゆる～く楽しみながら。最近では、淡路島で、誰もがくつろげる「実家」づくりプロジェクトに力を注いでいます。

ビジネスの力で人の縁を。難しいことだけれど、そこにチャレンジするテッドさんのこれからが、楽しみで仕方ありません。（Ｔａｙａｎｇ）

琉球料理「百幸地」の幸地和浩さんと可奈子さん

北区西天満3-1-5英和ビル1F

ウチナンチューと讃岐の人が大阪で出会った小さな恋の物語

難波橋（ライオン橋）の北側近くに、昔ながらの琉球料理を振る舞ってくれるお店があります。『百幸地』。沖縄の言葉で「百歳まで生きた幸地さん」という意味。お店を営む幸地さんのおばあちゃんが食べていた琉球料理でみんなが楽しく長生きできますように、という思いが込められています。なかなかめでたい名前ですね。

大半の食材が沖縄直送のものであることは当然として、そこに、関西の極上の調味料を駆使して、こだわりの一品を出してくれるお店です。

料理だけではありません。この店の大将である幸地さんとその奥さんの可奈子さんの周りには、いつも、たくさんの輪ができています。大柄で南国の太陽みたいな幸地さんの軽快なトークは、大阪と沖縄ってもしかして地続きか？というくらいに、いつも冴えわたっているのです。特に常連さん相手になると、まるで近所のお兄ちゃんみたいです。ときには幸地さんから呼び出しの電話がかかってくることも。でも、幸地さんのことを「やっけーしーじゃ（やんちゃな先輩）」と慕っている常連さんは、用事がないかぎりお店に足を運んでくれます。なかには仕事中に抜け出してくる方もいるとか…。ただ、可奈子さんをダシにして笑いをとるので、ちょとタチが悪い（笑）

でも、よーく見ていると、そんな幸地さんの手綱をしっかりと握っているのは可奈子さんだということがわかってきます。たしなめ、縁の下からよっこらしょと持ち上げているのが可奈子さん。

そもそも、味の最終チェックを担っているのは、可奈子さんだったりするのです。「何度も味見しながら料理しているうちに、味覚がおかしくなってしまうんですよ」。

さて、幸地さんは、今から30年ほど前に実業団の柔道の選手として沖縄県の嘉手納から来阪。一方、可奈子さんは香川県のご出身。文化人類学や民俗学が好きで、沖縄にも興味があったそうです。

そんなふたりは、大正の沖縄料理店で出会います。当時、酔っ払っていた幸地さんは、初対面の可奈子さんに対して、「ブサイク！あっちへ行け！」と暴言を吐いたそうです。えらいことです。

ところが後日、幸地さんが謝りに行ったことをきっかけに付き合いがはじまり、半年後にはご結婚。あまりにも出来過ぎた話なので、最初の暴言は幸地さんの作戦か？　今でも料理の連携プレーとは裏腹に「嫁は俺じゃなくて沖縄と結婚したんだ」と可奈子さんに暴言を吐いていますが、照れ隠しであることはバレバレです（笑）

『百幸地』では、夜ごと、たくさんの輪ができますが、その輪の中心には、ウチナンチューと讃岐の人が大阪で育んだ愛のかたちがあるのです。多文化共生って、こういうことかもしれないと、ニンジンシリシリをつまみに泡盛を飲みながら、しみじみと思う夜なのでした。（Ｔａｙａｎｇ）

琉球民謡協会関西支部 天六教室
玉城流 隆扇糸洲会会主

糸洲勝子さん

北区本庄東1-6-7

沖縄古典舞踊は、静かな踊りなんです

本庄に沖縄舞踊教室があります。

琉球泡盛酒場「とぅるるん」の斜め向かい、1階にたこ焼き屋さんのあるビルの3階です。会主をされているのは、糸洲勝子さん。

糸洲さんは、中学生の頃、三線のショーを見に行ったことがきっかけで沖縄舞踊、民謡、三線をはじめました。沖縄出身のご両親のもと、大正区に生まれた糸洲さんは、大正区の先生と沖縄の先生の両方に習いました。教室をはじめて38年。昨年は、文化振興などに貢献した人物を顕彰する民間最高の褒章「東久邇宮文化褒賞」を受賞されました。

「沖縄舞踊の魅力は、あの、なんとも懐かしい音楽ですね。それと静かな踊りです。踊りは能に少し似ていますね」と。沖縄舞踊とひとことで言っても、古典舞踊、雑踊りとあり、古典舞踊の曲目だけでも何百種類とあるそうです。「古典舞踊は、琉球王国の王宮で踊られていた宮殿舞踊なんです。600年の歴史があります。今ではさまざまな流派がありますが、大きなものは玉城流と渡嘉敷流。流派のなかでは、教室は違っても踊りはひとつです」。同じ流派の人とは同じ曲を同じ振り付けで踊れるのも魅力のひとつなのだそうです。

取材時、ちょうど上級クラスのお稽古がおこなわれていました。女性が糸を巻く様子を踊る「かしかけ」、柳という意味の「やなじ」、縫っている花という意味の「ぬちばな」など、古典舞踊を立て続けに踊ります。上級クラスになると古典舞踊のなかでも、古典七踊りといわれる踊りがすべて踊れるそうです。1曲、長いものでは15分。楽器と歌に合わせて、足でリズムをとります。腰を落として、すり足。緩やかな所作。たしかに、能に似ています。静かで、滑るような動きの連続です。太い紐を通した籠や、柳のようにしなる棒、枝のついた造花、傘など、曲ごと、場面ごとに使われる道具もさまざまあります。紅型（びんがた）の衣装を身に付けて踊る姿は、とても華やかで趣があります。

教室は毎週土・日・月の3日間。踊りの上級クラス、中級クラス、新人クラス、そして三線のクラスがあります。上級クラスでは、毎年11月におこなわれる師範試験向けのお稽古や、すでに教室を持っている方がさらなる勉強に通うもので、糸洲さんはほとんど踊らず、動きの指導にあたります。中級クラスでは古典舞踊を、新人クラスでは雑踊りを習います。土・日の三線のクラスは、粟国島出身の糸洲さんのご主人が指導されます。生徒さんは40～50人。沖縄ゆかりの人は3割程度で、残りの7割は大阪の人なのだそうです。なかには、千葉県から月に一度通ってくる人も。糸洲さんの朗らかで優しい人柄に包まれて、教室は今日も放課後の女子校のような雰囲気です。（棚橋真理）

糸洲勝子会主（左下）と生徒さん

ハイサイ！ハイタイ！ キタは、全国の都道府県の大阪事務所が集まっている場所でもあります。沖縄県事務所は大阪駅前第3ビル21階にあります。平日の9時～17時45分まで営業。「そうだ、沖縄の…」となにか調べたいときにはぜひ立ち寄ってみましょう。思わぬ発見があるかも。

ハイサイ！ハイタイ！

「琉球」「蠱屋」「ていだ」…、キタにある沖縄料理店では、会場を踊り歩くカチャーシーも楽しめます。ステージの最後はお店にいるみんなで踊って、盛り上がりは最高潮に。踊り歩いていると、なぜか前後の人と仲良くなってしまうのも魅力です。

拝啓 伊礼 哲先生、沖縄民謡のおもしろさを教えてください

企画・構成・文／平井裕三
撮影／浅香保ルイス龍太

「平井っ！　久しぶりに顔を出したと思ったら、稽古ではなく取材か。おまえの嫁は元気にしとるか？」。

かつて伊礼琉球民謡研究所の門下生だった私が伊礼先生を訪ねたのは5年ぶり。にもかかわらず伊礼先生は気さくに話しかけてくれ、沖縄にルーツを持つ妻（両親が沖縄出身）と娘のこともちゃんと覚えていてくれていました。

今では大阪で民謡居酒屋と民謡教室を運営されている伊礼先生ですが、さてこれまでの道のりは、どんなものだったのでしょうか？　今回、じっくりうかがってきました。

伊礼哲先生は1953年（昭和28年）12月10日、沖縄県の伊是名島生まれ。15歳で島を離れ、那覇の高校で学びます。

「沖縄の離島には高校がなくてね。みんな中学卒業と同時に生まれた島を離れなくてはならない。島の人間の運命みたいなものだよ。沖縄の離島の人間はみんなそうだ」。

南大東島を舞台にした映画『旅立ちの島唄～十五の春～』さながらの出来事が、そこにはあったのでした。

22歳までを那覇で過ごし、1975年（昭和50年）、神戸の港湾荷役会社の仕事をしていた姉夫婦の誘いもあり、伊礼先生は沖縄を離れ神戸へ向かいます。港湾関係の仕事に従事するためでした。それから20年後の1995年（平成7年）、阪神・淡路大震災が起こります。この震災こそが、その後の伊礼先生の人生を変える、大きな転機になります。

「震災のあと、働く場所が突然なくなったんだから、あのときは本当に大変だった。でも震災がなかったら、うたっていなかったかもしれないよ」としみじみ語る伊礼先生。

震災後、貿易港としての機能が低下した神戸港では、港湾の仕事が激減します。そこで伊礼先生は会社を辞め、本格的に音楽活動に力を入れはじめたのでした。

幼少から独特の旋律と唱法を持つ三絃（さんげん）と琉球民謡に親しんでこられた伊礼先生は、自然と三線（さんしん）を手に演奏するようになっていました。

1974年（昭和49年）より琉球民謡界の重鎮である登川誠仁氏に師事し、内地に出てからも仕事のかたわら沖縄出身者の集まりやチャリティーコンサートなどで音楽活動を続けてこられた伊礼先生は、多くの人の応援のもと、1993年（平成5年）『伊礼琉球民謡研究所』を開設、1995年（平成7年）、尼崎市内に民謡沖縄料理店『琉球國』をオープンさせ、民謡の普及にも力を入れはじめます。翌年にはオリジナルCD『沖縄の夜が更けて』を発表し、有線リクエストも開始するなど、民謡歌手として本格的なデビューを果たしたのでした。

「尼崎には宮古島出身者が集まっていて、コンクリートを平らにする、ならしの仕事をしていた人が多かったなぁ。みんなの呼びかけもあって尼崎を拠点にしたんだよ」。

1992年（平成4年）にはTHE BOOMの『島唄』がヒットし、2001年（平成13年）に放送されたNHK連続テレビ小説『ちゅらさん』の影響により琉球民謡を習う人が増えたことで、神戸、明石、大阪で出張民謡教室を開くことにもなります。

そして2004年（平成16年）、天神橋7丁目に三線専門店『さんしんや～とうるるんてん』を、本庄東に『琉球泡盛酒場とうるるん』をオープンさせ、北区へ。

2007年（平成19年）には、大阪駅前第3ビルに民謡居酒屋『島唄ライブ 琉球』もオープン。『島唄ライブ 琉球』（土曜）と本庄東の『本庄会館』（月曜）にて、民謡教室もはじめられ、活動拠点は尼崎から大阪市北区へと移っていきます。

auのCMでの浦島太郎役、そして三線と唄で大ヒットした『海の声』で紅白歌合戦の出場も果たした桐谷健太さんは、もともと『さんしんや～とうるるんてん』で三線を買った北区民でした。

「彼が三線を覚えるきっかけになったのは、ワシがここで三線を売っていたからだよ（笑）　あれから三線教室の体験申し込みがとても多くなって、すごかったよー」。

そんな伊礼先生に、直球で「先生にとっての琉球民謡とは何ですか？」とぶつけてみました。

すると、ひとこと、「未知の世界」。

「内地の民謡は、昔からうたわれてきた曲を習う、いわゆる〝伝統〟でしょう。でも、沖縄の民謡は、伝統だけでなく、毎年新しい唄が〝生まれる〟。

本島では新曲の発表会があって、毎年数多くの応募があるんだ。年に100曲は新曲が生まれるのかな。そのなかから10曲くらいがCD化されるよ」。

伊礼先生は、毎年曲が増えて進化する民謡は琉球民謡以外に例がないと言います。

「今の生活をうたうのが民謡。昔の民謡をうたうだけだったら、今の生活と結びつかなくて、気持ちがいまひとつ乗らないだろう」。

「流行で三線を習いに来る人が増えたことはうれしいけど、唄があっての三線。だから唄の意味も教えるし、唄をうたうために三線を教える。でも最近は唄の意味を知りたいという人が減った。もっと琉球民謡がうたわれてきた本当の意味、歌詞の素晴らしさを知ってほしい」

とおっしゃっていたのがとても印象的でした。

伊礼先生は、琉球國民謡協会関西支部長、琉球民謡登川流研究保存会関西支部長として、琉球民謡の普及にも努めておられるのです。

伊礼先生の次なる夢は東京進出。

2009年（平成21年）、沖縄に『島唄ライブ 樹里』をオープンさせて故郷に錦を飾った伊礼先生ですが、さらなる夢は、東京に出店して「日本一になる」ことなのだそうです。

予定がないかぎり、毎週土曜と日曜に民謡居酒屋『島唄ライブ 琉球』でステージに立たれる伊礼先生。そこでは、愛孫である天才三線少女の樹里ちゃんが演奏することも。リウマチを患い、注射を打ち続けながら、お店を盛り上げるためにステージに立ち、また三線や琉球民謡を多くの人に教え、その普及に邁進する伊礼先生なのでした。

ユーモアたっぷりの話術でお客さんや門下生を笑わせる伊礼先生。忙しいなか、お時間を割いて取材を受けてくださった伊礼先生。どの伊礼先生にも、今までの人生がその人柄ににじみ出ているんだと、あらためて感じた夜でした。

（終）

伊礼 哲

沖縄県北部の伊是名島出身。琉球民謡界のジミヘン・登川誠仁に師事。

1975年に島を離れ、神戸の港湾荷役会社に就職。1993年、伊礼琉球民謡研究所を開設。1995年、阪神・淡路大震災を期に音楽活動を本格化させ、オリジナル曲「恋のジントヨー」「名瀬の女」をリリース。1996年、「沖縄の夜が更けて」をリリース。2003年、琉球民謡界の最重要歌姫・大城美佐子とジョイント。

三線専門店「さんしんや～とうるるんてん」（天神橋7丁目）、民謡居酒屋「島唄ライブ 琉球」（梅田）、「島唄ライブ 樹里」（那覇）を経営する傍ら、ミュージシャンとしても持ち前の笑いのセンスで楽しいステージを展開する。登川誠仁の〝セイグワー節〟をもっとも色濃く継承するひとりにして、関西発の沖縄文化を担う第一人者。下ネタ連発のくせに、全国に女性ファンを多数持つ、徳高いおじぃ☆

ハイサイ！ハイタイ！

特別に決まった振り付けがあるわけではありませんが、ここでカチャーシーの動きをひとつ。バンザイして、両手を右に左に、ちょうど襖を開ける感じで振るだけ！　そして会場中を輪になって練り歩くのです。

ハイサイ！ハイタイ！

天五中崎通り商店街のなかほどにある「梯梧家」。春、2階奥の個室の窓を開けると、桜が真ん前に見えます。この桜は、お店の裏手にある黒崎町公園の桜です。老舗の沖縄料理を楽しみながら、お花見ができてしまう穴場スポットなのです。

沖縄そばを召し上がれ。

文・写真／編集部　構成／浅香保ルイス龍太

「じゅまる」の八重山ソーキそば

「てぃーあんだ」の沖縄そば

「友小ー」のソーキそば

「梯梧家」の沖縄そば

沖縄そば。沖縄言葉だと、沖縄すば。

沖縄の人は、なによりも好んで沖縄そばを食べる。それこそ香川におけるようどんのように、どこに行っても沖縄そばがある。専門店はもちろん、食堂、居酒屋、バー、喫茶店、カフェ…、どこにでもあって、朝から食べている人もいれば、お昼に、宵越しに、ちょっと小腹が空いたときに、飲んだあとの〆に、ときもところも選ばずに、沖縄そばは食べられている。沖縄では沖縄そばが食べられる店は信号の数よりも多いに違いない。

が、しかし、考えれば考えるほど不思議なそばなのだ、沖縄そばは。

なにしろ、「そば」という名前なのに、そば粉はまったく使用されていない。小麦粉だけ。それはもはやうどんだと思うのだけれども、「そば」と呼ぶ。ただし、つなぎかたがうどんとは違う。うどんは塩水で粉をつなぐけれども、沖縄そばは灰汁（アク）を使う。

スープも独特だ。トンコツとカツオの澄ましが基本。トンコツを煮込むときに脂をすくい取るので、トンコツラーメンみたいに白濁しないし、脂っぽさも少ない。そこにカツオを強く効かせるので、爽やかなスープになる。

具は、原則として、豚の三枚肉とかまぼこ、ネギと紅しょうがのみ。ソーキそばは、ソーキ（豚のスペアリブ）。ただ、この原則は、往々にして破られる。

普段着の食べものの常で、飽きが来ず、いついかなるときでも食べることができる。なんということのない食べものなのに、しみじみと美味く、正真正銘のソウルフードだと思う。ひとくくりに「沖縄そば」といっても、那覇、首里、名護のそれは違うし、本島を離れて、石垣や宮古のものも違う。いやいや、家ごとに違う。しかもこのソウルフードは、驚くべきことに今も発展的進化の途上にあって、じつにさまざまなバリエーションが日夜生まれているのだ。

こんなことを書いていると、今すぐにでも沖縄に飛んでいきたい気分になるけれども、「つひまぶ」は北区の地域情報誌。やはり北区で探さねばなるまい。じつは、沖縄料理や沖縄そばが一般的になった今、北区にも、沖縄そばを食べさせてくれる店はたくさんあるのだ。沖縄出身以外の方が沖縄料理店をやっているケースもたくさんあり、北区内にまんべんなく点在している。では、いざTR−P☆

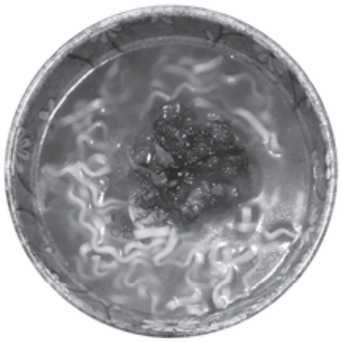
扇町公園の南西すぐにある**『てぃーあんだ 扇町本店』**（末広町3−22）は、北区では一番有名な沖縄料理店かもしれない。古民家をイメージした店内には軽快な沖縄民謡が流れ、ときには三線のステージが繰りひろげられる。店員との距離が近いのがこの店の魅力のひとつで、オバァの話を聞きながら、基本に忠実な沖縄そばを食べることができる。

天五中崎通り商店街にある**『梯梧家』**（黒崎町5−17）は、1953年（昭和28年）創業、北区でもっとも古い沖縄料理店。こちらの沖縄そばは、気がつけば進化している。以前はオーソドックスな沖縄そばだったが、今では水菜やワカメ、モヤシに白ネギなどが入っており、あっさりしていて、〆の一杯としての地位をより強固なものにしている。

「てぃだ」のソーメン汁

「煮売屋ぽっと」のソーキそば

「炮炮」の沖縄そば



「海の彼方」のソーキそば

「百幸地」の沖縄そば

梯梧家のすぐ近くにあるのは**『煮売屋ぽっと』**（黒崎町8−5）。沖縄料理店でなく、沖縄が好きな主人がやっている居酒屋。店名の通り煮物が得意で、時間をかけてゆっくり煮込んだソーキは濃いめの味付けで、酒のアテとしても人気がある。具はその日によって変化し、この日は店主が淡路島で買ってきたという タコ入りかまぼこが。

大淀中学校のすぐ南にある**『遊食家 じゅまる』**（大淀南1−11−10−2F）は、石垣島出身の店主がつくる創作そば。八重山のソーキそばが美味い。八重山そばは丸麺で太いのが特徴で、麺は沖縄から空輸。スープは白濁、こってり。塩が効いていて、トンコツラーメンのようなどっしりとした味。ソーキの脂っこさとスープの力強さが拮抗していて、満足感がたまらない。

本庄東にある**『友小ー（どぅしぐわぁ〜）』**（本庄東2−7−9）は、正真正銘の沖縄居酒屋。首里出身の姉御肌の女将さんのもとに、このあたりの沖縄出身者が夜ごと集い、ウチナーグチ（琉球言葉）が飛び交う。店内は、北区ではなく沖縄。時空がゆがんでいるのだ。トンコツをぐつぐつと7時間は煮込んでつくるスープは、それなりに濃厚なのにするすると胃に入っていき、しみじみと五臓六腑に染みる。あぁ沖縄！

天神橋筋商店街には**『奄美島料理　てぃだ』**（天神橋5−5−32）があり、夜ごと、沖縄音楽のステージが繰りひろげられている。が、しかし、鶏飯で有名なこの店には、沖縄そばはない。奄美には、沖縄そばはないのですよ。代わりに、ソーメン汁がある。トンコツとカツオでとったスープはあっさりとしていて、麺もソーメンのように細いので、いくらでも食べられる。ゆずの香りも食欲をそそる。これまた〆に最適の一杯である。

曽根崎から茶屋町へ進出を果たした**『Live Bar 海の彼方』**（北区茶屋町19−19 茶屋町アプローズB1F）のソーキそばは、カツオがしっかりと効いたスープと、継ぎ足し継ぎ足しのダシに5時間は煮込む濃厚ソーキがベストマッチ。弾力のないぐにゅっとした平らな縮れ麺にスープがとても合う。コーレーグース（島唐辛子を泡盛に漬け込んだ辛味調味料）もセットで出してくれるので、辛くして食べるとGOOD☆ オーナーの弾き語りや軽快なおしゃべりが、美味さを引き立ててくれる。

こだわりの店がひしめく西天満の**『百幸地』**（西天満3−1−5）では、百歳まで生きたおばあちゃんが食べていたそばの味を再現。麺、丸かまぼこ、三枚肉は、もちろん沖縄から直送。トンコツとカツオのダシからつくられるスープは、あっさりしながらも、しっかりと味が効いている。麺にスープがほどよく絡み、するすると入っていって、いつの間にかペロッと完食してしまうスグレモノ。

最後は、南森町の**『炮炮』**（東天満1−11−15）。那覇出身、京都で日本料理を学んできた店主が、こだわりの沖縄そばを出してくれる。キュートなシーサーのかまぼこに目を奪われてはいけない。5種類の素材を合わせてつくられるスープは、その日の気候によって素材の割合が変えられるという、こだわりのスープなのだ。手づくりロースハムは、薄めながらもしっかりと味がついており、食べ応えじゅーぶん。もはや沖縄そばを超えている。

とりあえず、ほんの9軒。それでも、これだけのバリエーション豊かな沖縄そばを北区でも食べることができる。本当は、まだまだある。たぶん、北区内だけで30軒以上はある。沖縄に行かずとも、いつの間にやら、しっかりとポジションを獲得している沖縄そばなのである。（終）

ハイサイ！ハイタイ！

オジー自慢のオリオンビールでおなじみのオリオンビール。2015年に味とデザインがリニューアルし、沖縄・奄美群島以外では「アサヒオリオンドラフト」としてアサヒビールが販売しています。本島で売っているオリオンドラフトと味が違うって本当？

南森町にある運興寺の桜はすごいですよ。塀から気前よく歩道にかかる八重は、まるで桜のトンネルです。造幣局の桜と同時期に咲きはじめて、通り抜けのような期限もなしの太っ腹☆　この桜の下にいすと机を出して宴会したいくらいだけど、それすると怒られます。

キタのえええもん

キタの手みやげ

「伊佐」の砂糖天ぷら

本庄西の業務スーパーやスーパーが立ち並ぶ一角に、「たこ焼き お好み焼き 伊佐」と書かれた屋台風のレトロでアジアンなお店があります。テイクアウトのみと思いきや、わずかながらイートインのスペースも。

お好みミックス焼４００円、お好み焼ぶた玉３００円、お好み焼いか玉３００円…、昭和のどこかで時間が止まってしまったかのような、信じられない値札がさげられているのですが、その端に「砂糖天ぷら３００円」なる値札があります。

砂糖天ぷら？　ちょっと耳慣れないメニューの下に、袋詰めされた現物が並べられています。見ると、サーターアンダギー。そっか、今でこそサーターアンダギーは沖縄の揚げドーナツとして一般に知られているけれども、元は「砂糖天ぷら」と言ったのですね。サーター（砂糖）＋アンダ（油）＋アギ（揚げ）で「サーターアンダギー」。

そう、このお店は、沖縄出身のオバァが切り盛りするお店なのです。

さて、ここのサーターアンダギーは少し変わっています。よく見かける球状の揚げドーナツではなく、ラグビーボールのようなかたちをしています。食べると、表面はサクサク、中はしっとり。通常のもっそりとした食感がなく、美味いこと！　いやー、これは美味いです。僕は、毎年のように沖縄に行くのですが、沖縄でもこんなに美味いサーターアンダギーはめったにお目にかかれません。そもそも、なんでこんなラグビーボールみたいな形状なのですか？　これまた、見たことありません。

「これはねー、3月3日の節句のときにつくるサーターアンダギー。うちでは、これを定番にしてるね。このかたちにすると、すぐに火が通るから、さっと揚げるだけですむさー」。と語るのは、沖縄本島から北西へ船で2時間ほどの場所にある粟国島出身の伊佐さん。

なるほどなるほど、美味さの秘密はその形状にあったのですね。この形状のおかげで短時間で揚げられ、もそもそとした食感がなく、えらく上等のお菓子に変身するわけです。しかもこれ、2、3日置いていても油がまわりません。

毎日１００個は揚げるそうですが、お祝いごとがあるときなどは、その数倍は揚げます。評判を呼んで、今では沖縄からも発注が来るのだとか。沖縄に行かずとも、ここ本庄西で沖縄のものよりも美味しいサーターアンダギーが食べられるって、ちょっと素敵ですね。

このラグビーボールのような形状には、もうひとつ秘密があります。

「粟国ではね、3月3日は朝からこのサーターアンダギーをつくって、そのあとは海岸に行って、赤と青のサンゴ礁をとってきてね、おひな様の代わりに飾るさー」。

もちろん今はサンゴ礁をとるのはご法度だけれども、沖縄の古いハマウリ（浜下り）の風習の名残が、遠く離れた大阪市の北区で見られるのは、なかなかおもしろい現象です。「砂糖天ぷら」だって、今では言わない言葉だし。1袋6個入り３００円の「砂糖天ぷら」。運がよければ、おまけもしてもらえます。そのサービス精神も、沖縄ならでは。（ルイス）

「伊佐」

【所在地】大阪市北区本庄西 1-15-14

【tel】06-6351-4191

【営業時間】10：00～17：00（なくなり次第終了）

【定休日】日曜

インディーズ系社会学者の

考現學 北区マップ

青山大介の「大阪梅田鳥瞰図２０１３」

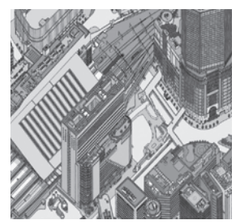
誰しも、鳥のように空を飛んで地上を見わたしてみたいと夢見たことがあるのではないでしょうか。「鳥瞰（ちょうかん）図」は、そんな人間の欲望を具現化した地図です。文字通り、鳥が斜め上から俯瞰するような視点で立体的かつ写実的に描かれるのが、その特徴です。

このような鳥瞰図は、近世・近代に絵師たちの登場によって盛んに描かれるようになり、まだ写真や映像が普及していなかった時代に、都市や観光地のイメージを伝達するメディアとして重要な役割を果たしていました。しかし現在、地図はデジタル時代に突入し、もっぱら移動のためのナビとして使われるようになる一方で、鳥瞰図のような「見わたす地図」の意義は忘れられつつあります。

そんななか、数少ない現代の鳥瞰図絵師として『大阪梅田鳥瞰図２０１３』を出版したのが、神戸在住の青山大介さん。高校生の頃、都市鳥瞰図の第一人者といわれる故・石原正の作品に出会い、その精密さに衝撃を受けて以来、石原イズムを継承しつつも独学で鳥瞰図を描いてきました。「海外の鳥瞰図はデフォルメされているものが多いんですが、石原さんの鳥瞰図は徹底的に主観を排除して正確に描かれています。そうすることで、鳥瞰図はまちの記録になるんです」。そう語る青山さんが初めて世に送り出した作品が、『港町神戸鳥瞰図２００８』。神戸で生まれ育ち、阪神・淡路大震災で被災した経験を持つ青山さんは、鳥瞰図を通して、震災から復興した神戸のまちを記録しようとしたのです。

こうして地元・神戸への思いを果たした青山さんが、次に目を付けたのが梅田でした。高層ビルが林立する梅田は、鳥瞰図の格好の対象であり、「画になるまち」だそうです。また、近年の梅田は再開発が進んでおり、「変わっていくまちだからこそ、描く意味があります」と青山さん。じつは石原正も１９８３年（昭和58年）に梅田鳥瞰図を描いており、それと同じ構図で現在の姿を描くことで、定点観測のようにまちの変化を捉えることができると言います。そのために空撮とフィールドワークを綿密におこない、ビルの階数や窓の数、ビアガーデンのテーブルの数、街路樹の数、さらにはＨＥＰＦ－ＶＥの観覧車の複雑な骨組みまでもが忠実に再現されているのは圧巻のひとこと。気が狂いそうになることもあったそうですが、誰も気付かないようなディテールも決してごまかさないのが青山さんのこだわりです。

ただ、青山さんの作品には、まちを正確に捉える冷徹さだけでなく、豊かな色彩と柔らかいタッチで表現される温かみがあり、まちへの愛情が感じられます。「20年後、30年後に見てもらって、『あのときはこうやったね』と懐かしんでほしい」。そんな思いを鳥瞰図に込める青山さんが未来に残すのは、まちの「記録」、そして「記憶」なのではないでしょうか。変わりゆく梅田を一望のもとに収めた鳥瞰図は、きっといつまでも色あせず、時が経てば経つほどに価値を増していくはずです。（松岡慧祐）



『大阪梅田鳥瞰図 2013』（青山大介）

扇町公園の東の土手に、3本だけ早咲きの桜があるのですよ。陽光桜と言って、ソメイヨシノよりも10日程度早く咲きます。桃の花のような濃いピンクで、枝ぶりもまったく違うので、すぐに発見できます。おそらく、北区内で一番早くに咲くのは、この桜！

北区銅像巡礼

岩田新治郎氏之像

２０１５年（平成27年）6月28日にオープンした、大淀中3丁目にある中三会館。

その入口はガラス張りになっていて、外からも銅像があることがわかります。入ってすぐ、真正面にある階段の左手に、岩田新治郎氏の銅像があります。

台座の碑文には、

「岩田新治郎氏は明治三十年当地に生まれ、家業の米穀商に励むかたわら青年会活動に力を入れ、昭和十六年浦江連合会長に、翌十七年大阪市会議員に当選、五年にわたり市政に従事、その後も区選管委員長、市固定資産評価審査委員、区民生委員推薦委員長等幾多の公職につきひたすら社会奉仕に努めらる。

昭和三十三年「住みよい町つくり」の為当時大仁・浦江地域の人々と共に大淀町自治振興会を結成、その活動の場として大淀区商工会館を建設し、町の区画整理を手始めに、ユースセンター・市立幼稚園・保育所・緑の公園・児童遊園・警察派出所等の設置また道路舗装等数々町の文化・教育・土木・環境福祉に努められ、昭和四十三年大阪市民表彰を受賞、昭和四十八年本会会長を辞任。

この機に氏の姿勢を讃え、後世の範としてこれを創る。

昭和四十九年十一月吉日

大淀町自治振興会」

とあります。

大淀区が成立したのが１９４３年（昭和18年）、浦江・大仁が大淀町に地名変更されたのが１９６３年（昭和38年）ということですから、もしかすると、この地名変更も、大淀町自治振興会の活動の延長線上に位置付けられるのかもしれません。その会長であった岩田氏は、大淀の地域活動の礎を築いた人といえます。まちにとって忘れてはならない人。

当時、そんな思いで銅像は建てられたのでしょう。時を経て今、岩田氏のことを覚えている人も伝え聞いている人もあまりいないようです。なにせ、40年以上も前の話です。

しかし、岩田氏が育ててきた、まちづくりへの熱意は、連綿と受け継がれています。大淀には、熱心にまちづくりに取り組む人たちがたくさんいます。幼い頃から、若い頃からまちの活動に参加する人がたくさんいます。大淀町自治振興会の活動拠点として建てられた大淀区商工会館は、商工会の会議以外にも、地域の人の結婚式やお葬式までおこなわれていました。中三会館として生まれ変わった今も、地域活動の拠点として活用されています。地域のイベントや、子育てサロン、手芸を主としたおしゃべり場やそろばん教室などの貸し会場にもなっています。最新の小地域福祉活動計画を見てみると、大淀東地域では「ささえ愛？　お節介？　古くて新しい？　みんなが主役になれるやん!!」をキャッチフレーズとした『熱血ほっこりプラン』、大淀西地域では「安心安全で　めっちゃふれあう　おせっかいがいる　大淀西をめざして」をキャッチフレーズとした『ニコニコプラン』があります。なんだか楽しそうな、これらのプラン。つくった人の顔が見えるフレーズ。岩田氏がつくりはじめた大淀のまちは、今に至るまで途切れることなく、住民主体でまちづくりが続けられています。（棚橋真理）

木のものがたり

中津小学校のクスノキはどこへ行ったのか？

中津小学校の校歌は「くすのき茂る学びやに」という歌詞ではじまります。支援学級の名称も「くすのき」です。校庭には、クスノキが5本植えられています。ところが、校歌に出てくるクスノキは、現在の校庭に植えられている5本のクスノキではないようなのです。私のクスノキ捜索は、そんなところからはじまりました。

中津小学校が現在の場所に移転したのは、１９８７年（昭和62年）。それまでは、阪急中津駅近くの、現在の北スポーツセンターあたりにありました。校歌に歌われているクスノキは、この場所に植えられていたもののようです。

この中津小学校のシンボルともいえるクスノキは、移転時に新しい小学校の校庭には移植されず、どこかの公園に移植されたそうです。どこの公園に移植されたのか、北区役所や公園管理事務所などにも問い合わせてみましたが、手掛かりは得られず、長く中津に住む町内の方や、町会の役員にうかがっても、ご存じないようでした。クスノキはどこに行ったのか。その行方は、杳として知れません。そんなある日、中津小学校の校長先生が登校の見守りをされているところを偶然お見かけしたとき、件のクスノキについて、ワラをもつかむ思いでたずねました。すると、「そのことなら学校に詳しい先生がいますよ」と心強いご返事。暗礁に乗り上げていたクスノキ捜索に、希望の光が射した瞬間でした。

後日、校長先生から連絡がありました。学校の資料を基に調べたところ、クスノキは住之江区の南港中央公園に移植され、今でも立派に葉を茂らせていることがわかりました。また、南港中央公園に移植されたことを一部の卒業生が覚えていて、クスノキの下で同窓会を開いたという手紙がときどき学校に送られてくるそうです。その手紙を見るたび、学校内でも、クスノキのことはとても気になっていたとか。そして、これを機に実際に先生を現地に派遣し、クスノキ捜索は、一気に進展したのです。

このことは、学校便りや中津小学校ホームページ内の「学校日記」（２０１６年9月23日）でも報告され、中津小学校に通う生徒やその保護者も、このクスノキの経緯について知るところとなりました。

このことをきっかけにして、遠足でこのクスノキのある南港中央公園を訪れることが検討されたそうです。ただ、残念ながらこのクスノキがあるあたりは周囲になにもないので遠足の目的地としてはふさわしくなく、実現は難しそうだとのこと。しかし、中津小学校の卒業生たちがこのクスノキの下に集まって同窓会をするなら、できるかぎりのことは協力したいと、校長先生はおっしゃっていました。

長く中津に住んでいる人は、みんな、中津小学校のクスノキをとても誇らしげに、そして懐かしそうに語ってくださいます。私が中津に引っ越してきたときはすでに中津小学校は現在の場所にあり、私は、かつてのクスノキを実際に見たことがありません。今回、このクスノキの話をつひまぶで紹介したいと校長室を訪ねたとき、ふと壁を見ると、なんと、往時のクスノキが描かれた絵が飾られていました。当時の光景に思いを馳せ、中津の人たちが誇らしげに語られる理由が、少しわかるような気がしました。（平井裕三）

彼女とキタのラブストーリー
――第十回――

北区社会福祉協議会　豊仁地域副会長
市川政代さん

北区社会福祉協議会ボランティア登録第一号。

豊仁地域で、「市川さんに相談したら安心」「市川さんがやってるなら、私もやるわ」「市川さんに聞いてほしい」「市川さんはすぐ動いてくれる」と慕われる市川政代さん。昨年まで27年間、民生委員を務めてこられました。任期を満了された今も、名誉民生委員として、地域のボランティアとして、さまざまな活動をされています。そんな、動き続ける政代さんの原動力はどこから生まれてくるのか？　お話をうかがってきました。

周りに助けてもらった子ども時代

１９３８年（昭和13年）、大阪天満宮の門前にあった昆布屋さんの生まれ。

2歳の頃、両親の出身地である福井県三方に疎開します。お父さんは戦争に行きましたが、3年ほどで帰ってきました。中学2年生の頃、お母さんが倒れ、5人きょうだいの一番上だった政代さんは家族のお母さん代わりになります。当時、一番下の妹は1歳でした。

毎朝、家事をしてから学校に通いました。下のきょうだいの幼稚園の送り迎えから、学校の行事があればそれも参加しました。

「おじいちゃんおばあちゃんが交代交代に見に来てくれていましたね。親のきょうだいも来てくれたりしてね。それに、ご近所の人。周りのいろんな人が助けてくれました」。

それでも、政代さんにしかできないこともたくさんありました。

「夜、学校で映画の上映会がある日にね、きょうだいを寝かしつけて早く行こうと思っているのに、そんな日にかぎってなかなか寝ないんです。なにか察知するんでしょうね。結局、妹を学校の向かいにある呉服屋さんに預けて行ったんですけど、妹がね、いつの間にか学校に来ていたんです。さみしかったんでしょうね。今では妹にかわいそうなことをしたって思えるんですけどね」と、少女時代の複雑な思いを語られます。

また、夏休みの洋裁の宿題では、ご自身でデザインのイメージをつくり、ご近所のお裁縫上手の人に裁ち方を習い、縫い物が上手な人に縫い方を習い、そうやって作品を完成させ、賞をもらったことがあったそうです。「私、負けん気が強かったんでしょうね。それに、ご近所の人によく助けてもらいましたわ」と笑って話されます。母親がそばにいないことを言い訳にしないということなのでしょう。周囲の助けも借りながら、毎日、家のことや、お父さんの仕事の手伝いや農作業など、とにかく動き続けていた政代さん。当時をよく知る親戚のおじさんやおばさんからも、あとあとまで「ようがんばった、ようやった」と言われていたそうです。

動くこと。ひとりの活動で収まらないときは、周囲の人と力を合わせること。今の政代さんの活動スタイルは、この頃に培われたようです。

「子どもの頃に、周りの人に助けてもらってきました。だから、今はそのお返しをしている気持ちなんです」と語られます。

動き続ける姿は、取材中でも。お話をしながら「寒かったらもうひとつ暖房入れましょうか？」とエアコンをつけに立ったり、「あ、コーヒーもう冷めちゃったんじゃない？　あったかいのを入れましょうね」と、とにかく動こうとされる政代さん。ゆっくり座っているなんてもったいない。ためらう前にもう身体が動いているといった様子です。「すぐ動きたいんです。動いているのが好きなんです」とニコニコ顔で話されます。

「10年も20年も住んでいれば立派な地元の人間」

そんな、福井での生活を続けていた政代さんに結婚の話が持ち上がったのは、21歳のとき。

大阪で時計屋さんをしていたおじさんの紹介でした。それまでも、おじさんのもとへたびたび遊びに行っていた政代さん。ご主人となる人は、おじさんと同業の時計屋さんで、何度も顔を合わせていた人でした。「遊びに行くといつも来ていた人だったんですよ。おじさんが呼んでいたんでしょうね」と。結婚してからも、時計屋さんとお菓子屋さんという二つの家業と子育てに、ひたすら働き続けました。近所の産婆さんに「妊娠8ヶ月までは動いても大丈夫」と聞くと、本当に8ヶ月まで働きづめました。3人目の子どもを妊娠しているときは、自転車の前かごに荷物を積んで、長男を背負い、長女を後ろに乗せて走っていました。お店のある天六から十三まで往復したりもしていました。

子どもが幼稚園に入ると、ＰＴＡ活動がはじまります。結局、ＰＴＡ活動は、次男の中学卒業まで続きました。数年するとＰＴＡ活動と並行してボランティア活動もはじめます。社会福祉協議会の研修で、車いすの扱い方も覚えました。精力的に動き続ける政代さんを、周囲の人が放っておくはずもなく、あるとき、町会長から民生委員就任の依頼を受けます。町会長は日参する勢いで説得に来ました。「それはもともとの、地の人がすることだから」と固辞しますが「10年も20年も住んでいれば立派な地元の人間」と言われます。結婚を勧めてくれたおじさんからも「そう言ってもらえるということは、自分のなかになにかあるってこと。やってみたらいい」と背中を押されます。ご主人もそれに同意され、民生委員を務めることになりました。47歳のときのことでした。

自分がやりたいと思ったことをやってあげられるのが、民生委員

民生委員になってみると、これが政代さんの性分に合っていました。「自分がやってあげたいと思ったことを、すぐやってあげられるのが民生委員なんです。自分が動いて、やるだけなんですよ。私、すぐ動きたいからね」。自分の判断でやってあげたことは、うまくいかなくても納得ができます。「それに、やったことで喜んでもらえると、うれしくなって、またやっちゃうんです」。政代さんは、民生委員の活動にやりがいと歓びを感じていたようです。

相談されると、「うんうん、いいよ」と二つ返事で快諾し、すぐ動きだします。細かいことは後にして、「で、なにしたらいいの？」と、とにかく動きだします。

政代さんが民生委員として活動していた時期、地域にひとり暮らしの高齢者が60人いました。政代さんは、その全員の状況を把握して活動していました。目がまったく見えなくなっても、ひとり暮らしをしているおばあさんがいました。ごはんを炊いたり洗濯までできる、すごい人でしたが、「お布団を丸洗いしてあげたら喜んでくれてね」。そんなふうにして、20年通いました。近所で救急車の音がすると、夜中でも目を覚まして飛んでいきました。夜明け前の午前3時に自宅のインターホンが鳴ることもありました。用件はないけれども、政代さんに会いたくなって来てしまう人がいました。

「不安で不安でしょうがないんでしょうね」と相手の気持ちを思いやり、どんなタイミングでも対応しました。いろんなことを忘れても、政代さんのことだけは覚えている人もいました。

ひとりではできない活動ももちろんあります。週に2、3回、人工透析に通うおじいさんがいました。治療の行き帰りは車いすでの介助が必要です。ひとりではとてもやりきれません。そんなときはチームを組んで交代で対応しました。「10人くらいで交代でね、誰かが行けなくなったら私が行ったらいいんです。やるからには、きっちりやりたいんです」と。10人の仲間と15年続けました。「一緒にやってくれる仲間が集まってくれるのも幸せなことなんです。私は、輪をつくるのが好きです。ボランティアをしていて良かったことは、みんなと仲良くできることですね」。政代さんは、笑顔で話されます。

民生委員の全国大会での講演会で聞いたのがきっかけで、地域の子育て支援を立ち上げました。その活動も11年以上続いています。10年以上、引きこもりになっている息子を持つお母さんから相談を受けたこともあります。「早く相談してくれてよかった。引きこもりの人は外に出ないから、周りの人も気付いてあげられないからね」と。

高齢者だけでも、子どもだけでもなく、地域の人みんなを見守っている政代さん。地域に住む、ひとりひとりに何年も何十年も寄り添います。

活動が多岐にわたるため、ハードルの高い課題を抱えることも多いように思えますが、「自分で抱え込まないで、相談できる人に聞いてやっています。専門の人につないだりもします。みなさんのおかげでさせてもらっているんです」とおっしゃいます。どんなときに誰に相談したらいいのかも、政代さんは把握されています。苦労したことはないですか？とうかがうと、首をかしげながら「苦しいと思ったことはないですね。人は思ってくれているかもしれませんけど、自分では思っていないからやれているんでしょうね」とニコニコしながら話されます。

「うん、うん」と人の話を聞き、ニコニコされている政代さんの活動のすべてをもっとも身近に見ていたのはご家族でした。

ご主人に「今仕事ない？」と聞くと「今ないからええよ」と送り出してくれました。救急車の音を聞くと飛び出す政代さんの姿に、「あんたはすごいな」と言ってくれました。「家族の理解がないとできません」と断言されます。

今では「今度、地域の会計を任されることになったよ」と次男さんから相談を受けるそうです。「普通に、きっちりと取り組んだら大丈夫よって言ったんですけどね。中学校のＰＴＡの役員もしてましたわ。もうこれは血ですかね」とにっこり。息子さんも地域の活動をしていることを、喜んで見守っています。

民生委員を満了し、少しずつ役を離れ、活動を次の世代に引き継ごうとしている今、楽しみは、お寺巡りとお孫さんの成長です。西国三十三所を結願し、今では新西国三十三所を巡っています。「西国のいいところは、意外と近いところにお寺があるとわかったこと。すぐ近くの鶴満寺さんとかね」。なんだそうです。そして、これから社会人となるお孫さんのこと。「今21歳で、私が結婚した歳なんですよ。孫のお嫁入りの姿が見たいですね」と楽しみにされています。

でも、「ボランティアは、生きているあいださせてもらいたいですね」と役を離れても動き続ける気持ちは変わりません。やっぱり、ゆっくりのんびりとはならない政代さんなのでした（終）

お母さんの後ろ姿

聞き手・書き手／棚橋真理　撮影／浅香保ルイス龍太